

オープン
カレッジ

今年2月に小学館から刊行された図鑑NEOアート「はじめての国宝」が人気を集めている。約250点の国宝がカラー写真で掲載され、さまざまなテーマで日本の美術の見方を紹介し、原寸大写真やクロースアップ写真などを使って作品の魅力を伝えており、実際に読んでみると、その内容は子どもだけでなく、大人も十分に楽しめるものである。

さて、今こうして脚光を浴びる国宝とは異なり、残念ながら失われてしまった国指定の文化財を記録した「戦災等による焼失文化財

戦災と名古屋の文化財



焼失前の七寺本堂の仏像（七寺提供）

区)の本尊・十一面観音菩薩立像(平安時代後期)なども同年の空襲で失われている。

もちろん、市内すべての文化財が灰じんに帰したわけではなく、例えば、焼失した七寺本堂の仏像のうち、観音・勢至菩薩坐像(平安時代後期、重要文化財)は炎上する本堂から住職ら2人の手により救出されており、観聴寺の二体の鉄地藏(室町時代、県指定文化財)は鉄という素材ゆえに戦火を受けても姿を留めることができた。また、「火伏せ不思議の弥陀」と信仰される栄国寺(中区橋)の阿弥陀如来坐像(鎌倉時代、県指定文化財)のように、寺院自体が火災を免れたことで残った事例もある。最近のニュースでは、名古屋城で焼失を免れた「銅鯨」が4月22日に名古屋市指定有形文化財に指定されたところである。

太平洋戦争中、名古屋には63回空襲が行われ、投下弾は1万4500トを超え、死者7858人、負傷者1万378人、被害戸数13万5416戸と報告されている(総務省、名古屋市内における戦災の状況)。現在でも掘削の過程で発見される不発弾やその撤去に伴う交通規制などから戦争の爪痕を感じさせられることがあるが、戦災で失われた文化財の存在とその損失の大きさを知ることまた戦争を考える一つの入口になるものと考ええる。そして、戦禍を経て残された文化財は過去の歴史を未来に伝える大切な証人でもある。

失われた文化財から戦争を考える

昭和・平成の文化財過去帳(文化庁編、戎光祥出版)という本がある。この本は、1963年から66年



名古屋大学文学部准教授
見田 隆鑑

みた・たかあき 美術史学。
名古屋大学大学院文学研究科博士(文学)。
士後期課程満期退学。博士(文学)。

界大戦末期の名古屋空襲で惜しくも失われてしまったものがある。この本には、名古屋城および本丸御殿の障壁画、七寺(中区大須)の本堂とそこに祀られた阿弥陀如来坐像と二天立像、高岳院(東区)の本門、性高院(千種区)の表門、本遠寺(熱田区)の楼門、熱田神宮の海上門と鎮皇門の写真が掲載されているが、これらはみな1945年の戦災で焼失したものである。この他に観聴寺(熱田